OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	懸垂分詞節由来表現の構文化 : Traugott and Trousdale(2013)の観点から
Author(s)	早瀬, 尚子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2015, 2014, p. 21-30
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53772
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

懸垂分詞節由来表現の構文化：
Traugott and Trousdale (2013)の観点から

早瀬尚子

1. 序

懸垂分詞節の中には、その一部が独立して用いられて変化し、談話管理的・話者モダリティ的・メタ的意味を持つものが見られる。このことについてはこれまで早瀬(2009, 2011, 2014, 2015)およびHayase (2011, 2014)で、個々の事例について検討し、議論してきた。具体例は以下に述べる通りである。

(1) a. How are you? Fine, ***considering***.
b. ***Moving on***, let's see how it works.
c. ***Speaking of which***, I better go. It's kind of late here.
d. All right, he's not going to get any health care, right, ***granted (that).*** Do we get campaign reform?
e. But ***having said that,*** it's time to get this thing stopped now.
f. ***Supposing*** I did?

(1a)のconsideringは「まぁまぁ」「言ってみれば」という緩和表現、(1b)は「さて、次に」など話題を進める表現、(1c)のspeaking of whichは「さて、そういえば」など話題転換表現、(1d)は「確かに、そうですよね」という承認表現、(1e)は「そうは言っても・さてそういったところで」と譲歩から話題転換表現へ、そして(1f)は「そうだったらどうだっていうの？」と聞き手に対して挑戦・反論する表現へと変わっていく。

いずれの例でも共通して見られる点がある。それは、本来であれば従属節構造をとして後続要素をとっていたものが、形式が変化して後続要素をとらない定型表現として用いられるようになることである。それに伴い、相手の認知のありように言及し指示、操作をするという対人関係的な側面の機能を共通してもつようになっており、新しい意味と形式のペアである構文が生まれていると認識できる。これは近年歴史変化研究の流れの中でTraugott and Trousdale (2013)が述べる「構文化現象」と考えられる。本論では、「構文化」という歴史変化の分野で近年キーワードとして浮上してきた概念と本現象とを突き合わせ、考察を加えたい。

2. 構文化：Traugott and Trousdale (2013)

ここ10年ほどの間で、言語変化研究の分野において認知言語学や構文論での概念であった「構文」が脚光を浴びてきている。語が意味変化を起こす要因として、その語が生じる文脈としての、語の連鎖環境が関わることが注目されてきたためである。「語だけではなく語の連鎖としての構文そのものも文法化現象を起こす (Hopper and Traugott (2003:1))」と述べられているように、意味変化は語だけではなくその生起環境である構文にも生じる。

つまり、意味変化は構文の中で、あるいは構文と共に、生じるという考え方である。

もともと文法化とは、内容語であったものが機能語へ、さらに究極的にはゼロ形へと一方向的に変化する、いわば縮小モデル(reduction model)で捉えられる現象とされていた。例としては、英語の本動詞 wollen が助動詞 will として機能するようになり、次第に He'll/She'll などの接語(clitic)を経て、単純未来のように最終的にはゼロ形になることが挙げられる。この変化がたどる方向性は、形式や統語位置、その本来的な意味のいずれも元のものと比較して縮小する道筋であり、逆ではない、ということが、一方向性仮説として提示されてきたのである。

しかしこの一方向性仮説の概念では捉えきれない言語変化現象が指摘されるようになった。一例として、表現の語用論的標識化が挙げられる。これは、語の本来の意味が希薄化するというよりは、新しい語用論的な意味が付け加わると言った方が正確であり、縮小モデルには合致しない。たとえば、a sort of [apple]（リンゴの一種・のようなもの）>He's sort of [weird]（ちょっと変）>[I am a queen], sort of.（言ってみれば私は女王だ）のように、統語的に生じる形式も意味も新しく増えている。これは、もはや「文法化」という名称をためらうようなものとなっており、意味がむしろ拡大する方向に向いている。Traugott (2010)では文法化には縮小モデルに基づくものだけではなく、拡大モデル（expansion model）に基づく意味変化もある、と明言しているが、これは文法化という現象の射程範囲を現状に合わせて拡げようとする動きだといえる。さらに、意味と形式の新しいペアが生まれたとも捉えられるので、新しい構文の誕生と考えることも自然である。

同じように意味変化が関わる現象に語彙化がある。語彙化は内容語の連鎖が全体として1つのまとまりを成す内容表現として定着するものが中心である（Brinton and Traugott 2005:96)。(たとえば、nuts and bolts で「ものごとの基本・土台」、up and coming「これから有望な」など)。この変化の方向は、文法化理論（の縮小モデル）で主張された一方向性仮説には合致しない。よって、語彙化と文法化とは互いに区別されるべき異なる概念だとされてきた。しかし、この語彙化現象は、結果として得られる全体的な意味が、部分の総和から導かれないという特徴を持っており、新しい構文の誕生という考え方とも親和性がある。つまり、狭い意味での文法化という基準を捨て、「構文」というキーワードで捉え直すことで、意味変化を包括的に記述説明できるようになる。

構文文法では、我々の文法知識が、形式と意味のペアリングとして成立する構文のネットワークに基づいて階層的に組み上げられると考えている（Goldberg 1995, Croft 2001, Hoffmann & Trousdale 2013)。この考えを言語変化研究に応用するならば、言語変化によって、ある言語の知識としての構文ネットワークの組み替えが生じていることになる。

構文化とは意味と形式の組み合わさった記号を創造することである。新しいノードを形成し、スキーマ形成や生産性、構成性などにおける変化を起こす。(Traugott and Trousdale 2013: 22)。このノードはネットワークに基づく階層性を成すが、Traugott and Trousdale (2013)では大きく3つのレベルを想定する。具体的な事例(construct)は

micro-construction のレベルに位置する。これら複数の共通性をサブスキーマ(subschema)の形で取り出したものが meso-construction のレベルとなる。最も抽象度の高いスキーマは、macro-construction という最上位のレベルに位置することになる。ただし、この 3 つのレベルは絶対的なものではなく、互いに相対的に形成されるものである。

構文化に伴い、その前後では小さな**構文的変化(constructional change)**が生じているとされる（Traugott and Trousdale 2013)。構文変化とは、意味と形式のペアにおける、意味だけ、もしくは形式だけの変化を言う。構文化の前に生じる構文的変化としては、①語用論的推論の拡大及び②意味化、それに伴う③形式と意味のミスマッチや④分布の変化が挙げられており、構文化の後に生じる構文的変化には①コロケーションの拡大と②形の上での縮小などが挙げられるとしている。

また、構文化は文法的構文化(grammatical constructionalization)と語彙的構文化(lexical constructionalization)に大別される(Traugott and Trousdale 2013)。文法的構文は非指示的かつ手続き的(procedural)な表現を結果として生み出す。be going to がアスペクトやテンスを表すようになるのはこの例となる。一方の語彙的構文は典型的には名詞や動詞、形容詞などのカテゴリーに対応するような、指示性の高い内容表現を生むと規定されている。例としては語形成に見られる blackboard (black+board)などがこれに当たるが、他にも{log/camp/bon}-fire や{morning/night/dog/cat}-person（～派・主義の・～を好む人）などの複合語や、snowclone と呼ばれるパロディ的表現（例：not the ADJest N1 in the N2; He is not the sharpest tool in the box.（あいつはバカだ・使えない、の意味））など、スキーマ拡張により生産性を見せる例もこの中に含められている。

文法的構文化と語彙的構文化はそれぞれ従来の文法化および語彙化を引き継ぐ概念ではある。しかし従来の 2 つの概念を区別することに困難があったように、この構文における 2 つの概念も段階的なものであり、実際には両極の間に中間的な構文(intermediate construction)が数多く存在するとされる。たとえば副詞でも文副詞 frankly などはそれ自体意味をもつけれども手続き的でもあるし、way 構文などは、way を用いる点では具体的で内容的だが、部分的にスケルトンな表現なのでこの中間段階に位置づけられる。

以上のような構文化という考え方に照らすと、懸垂分詞構文から懸垂分詞表現が独立して用いられるようになる本小論の現象は、語彙的構文化と文法的構文化の中間に属する現象だと考えられる。また構文化が生じる前後にそれぞれの表現で細かな「構文変化」とも言うべき現象が見られている。次章ではこの観点から少し詳細に検討を加えたい。

3. 懸垂分詞の対人関係構文化

3.1. 語彙的構文化としての懸垂分詞（句）表現

本稿で扱う対人関係的な分詞表現は、いずれも対応する懸垂分詞構文が元になっている。

(2) a. He looks young, ***considering*** *his age*.
b. How are you? Fine, ***considering***.

(3) a. ***Moving on*** *to the next topic*, you mentioned earlier that the next election will be tough.

b. ***Moving on***, let's see how it works.

(4) a. ***Speaking of*** *the economic recession*, how do you expect next year's the stock market?

b. ***Speaking of which***, I better go. It's kind of late here.

(5) a. ***Granted (that)*** there are millions of poor people in the world, but they're struggling to come out of their poverty.

b. All right, he's not going to get any health care, right, ***granted (that).*** Do we get campaign reform?

(6) a. Now I should say, ***having said that*** it comes from Kmart, the woman that we're hearing now, Sarah Hopkins, makes these things herself in all different sizes and has actually refined the making of them to a high art.

b. But ***having said that,*** it's time to get this thing stopped now.

いずれの例においても(a)例は懸垂分詞構文であり、(b)例がその懸垂分詞由来の談話管理的メタ表現である。ただし、懸垂分詞節をそのままとりだしただけでは新しい構文は生まれない。懸垂分詞節の中でも特定の語の連鎖が定着することで、新しい意味と形式がペアとなる構文化が見られている。上記の例では太字で表している部分がそれに相当する。

この現象は Traugott and Trousdale (2013)の言う「語彙的構文化」に相当すると考えられる。語彙的構文化は典型的には複数の語（や接辞）の連鎖全体でまとまった一つの意味をもつものとして定着する現象である。ここでは、moving on で「さて次に」、speaking of which で「そういえば」、having said that で「そうはいうものの、そう言ったところで」などの話題進行、話題転換の意味など、いずれもある特定の語（の連鎖）全体として内容語表現的な意味をもつようになっており、1 つの新しいイディオム的な定型表現が生じたと考えられる。また considering や granted は語の連鎖を成さずに単独で用いられるが、意味が considering で「まあまあ」という緩和、granted で「わかった」という承認を表す点では単語レベルで新たな構文化が生じていると見なせるだろう。

構文化が生じる前には、小さな構文変化が伴う。その 1 つの要因として Traugott and Trousdale (2013)では頻度の高さが挙げられている。ここでみる懸垂分詞由来の語彙的構文化でも、語の連鎖のまとまりが生まれるプロセスには共起頻度の高さとの相関性が見られる。たとえば BNC や COCA での分布を調べても、moving は on との共起がもっとも高頻度に見られており、moving on で一つのまとまりを成しやすい状況であったことがわかる（Hayase 2014)。同様に、speaking にもっとも頻度高く後続するのは of であり、語の連鎖としての結びつきが強い。また文頭に生じる having には said が後続する頻度が高く、さらに that の方が対応する this よりも後続する頻度が圧倒的に高いと報告されている（大橋 2014)。いずれの例においても、これらの語の連鎖がコロケーションとしてまと

まりを成すことが、コーパス分布からも確認できるのである。

また、これらの語彙的構文化にはスキーマ抽出による生産性が伴う可能性があることがTraugott and Trousdale (2013)では指摘されている。表現が構文化されるのに伴って変数が組み込まれ、さらに新たなバリエーションが生じるという現象である。懸垂分詞由来表現に関しては、その表現自体にバリエーションはないものの、その表現が使用される文脈が拡がる可能性が大きいことが指摘できる。その理由は、語彙的構文化のプロセスの中で、指示対象を汎用化する可能性が含まれるからと考えられる。指示対象の汎用化とは、共起対象が限定されず、幅広く可能となることを言う。わかりやすい例では、speaking of which の which が前出のものを比較的自由に指示することができる関係代名詞であり、これを構文の中に含むことで、使用文脈をあまり限定せずに幅広く使うことができるようになっている。また having said that の that も、this と比較して指示可能な範囲が広いため、使用文脈の制限が少ない。moving on においては最も共起する頻度が高いのは to だが、これを伴わないことで、逆に着点を明確に限定する必要がなくなり、単純に「進行」のみを表すこととなり、結果として使用の制限が減少したことになる。

語レベルでの構文化を起こしている considering や granted も、もともとは補文を導く標識 that を伴っていた。補文でありさえすれば、その内容についての制限はないので、これも変数を含んでおり、後続要素のバリエーションへの許容度が高い表現と考えられる。

構文化に付随する他の構文変化現象としては、語用論的な意味の拡大および意味化が生じることが挙げられている (Traugott and Trousdale 2013)。この現象は懸垂分詞由来の表現にも生じていて、変数を含んだ形で構文が定着し、使用文脈が拡がることで、次第に新たな意味が生まれている。たとえば、moving on においては、moving on to...に比べて後続要素に物理的空間的な場所だけではなく、話題を表すものが可能になることから、「次の話題に移る」という話題進行機能がより明確に生まれてくる(早瀬 2009, Hayase 2014)。

(9) a. ***Moving on to*** *the next issue*, we have another trouble...

b. ***Moving on***, let's check today's schedule.

(9a)では関連する「次の話題」に移ることを示しているのに対し、(9b)の方では(9a)よりも更なる話題の飛躍を許している。また、speaking of which は関係代名詞 which を含めて定着したために、指示できる内容の自由度が高く、speaking of...表現に比べて表せる文接続関係の範囲が広い。

(7) a. ***Speaking of*** birds, {I used to keep canaries. / #I'd better go}.

b. ***Speaking of which***, {I used to keep canaries/ I'd better go}.

peaking of に具体的な名詞が後続する場合には、(10a)のようにある具体的な話題 A から関連する別の話題 B へと移る状況を示すのが適切である。しかし speaking of which は その話題がそもそも最初から具体化されていないので、話題を移しさえすれば良く、従って(10b)のように話題を打ち切ることも表現可能となる。同様に、having said this よりも having said that の頻度が圧倒的に高く、その理由は this よりも that の指示対象の方が

状況など広い範囲を射程にしているために汎用性が高くなっているから（大橋 2014）と説明できる。さらに、この射程の広さと相関して、speaking of which と同様に現在の話題の打ち切りをも表せるようになっている。

(8) a. Sounds nice. *Having said that*, I' ve never been there.
b. Sounds nice. ***Having said that***, let's wrap up today's discussion.

(11a)ではある場所を話題にし、その場所のすばらしさに賛同を示しておきながら、実はまだ行ったことがない、という流れである。話題が依然としてその場所についてであることには変わりはない。しかし(11b)ではそれまでの話題を続けるのではなく、すっかりと打ち切ってしまうことを示唆しており、「話題の打ち切り」という新たな意味が見られている。

語レベルの構文化である granted/considering も、本来後続していた補文標識 that が省略されることで、本来持っていた述語的な内容的意味が薄められる。それと平行して、生起する統語的位置の自由度が増し、補文の主節化現象が見られる。特に(12c)のように単独で相手の発言を承認したり、自分の発言を緩和したりするモダリティ的な役割をも表すという意味の変化も見られる。

(9) a. ***Granted that*** four animals do not constitute total proof, I *still* don't require any further convincing.
b. All right, he's not going to get any health care, right, ***granted (that).*** Do we get campaign reform?
c. WOMAN 2: No man's supposed to put his hands on no woman.
DORTHA: But he drove her to her death.
MARTELL-Sr.: OK. OK. OK. ***Granted. Granted.***
WOMAN 2: I don't care if she was on drugs.
MARTELL-Sr.: Hold it. Hold on. Hold on.

(10) a. ***Considering*** (that) he has been in such background, he has accomplished pretty well.
b. He is a genius of the century, ***considering***.
c. How are you today? -----Pretty well, ***considering***.

(12a)(13a)は that 補文が本来の機能を発揮している事例で、considering/granted (that) は複文における従属節として機能している。しかし(12b)(13b)では that が省略（可能）であるか、補文標識としての働きをしていない。(12b)では「それは確かだ」と承認を行っており、(13b)では考慮(consider)する内容を失い、「彼が天才である」ことに対して若干保留を加える意味が生じている。(12c)(13c)ではさらにそれが顕著となっている。(12c)では自らの発言ではなく相手の発言に対して用いられ、「わかった（からもう止めて）」という打ち切りの意味、そして(13c)では「保留」の意味を全面に出している。両者ともに次第に従属節としての役割を失い、単独で副詞的な働きを行うようになっている様子がうかがえる。

このように、懸垂分詞由来の表現それぞれの語彙的構文化のパターンには共通点が見ら

れる。1) 頻度に基づくコロケーション化、2) 汎用性の高い変数を含んだ表現の定型化、3) それに伴って接続可能な要素の範囲の拡大、4) 結果的に表現する意味が拡大している。またいずれの意味も、4) 話題をコントロールするという語用論的な側面、をもつことも興味深い。懸垂分詞由来の語彙的構文化は、個々の syntagmatic レベルだけではなく、複数の事例を俯瞰した paradigmatic レベルでもスキーマを形成しているのである。

3.2. 文法的構文化

Supposing を用いた表現は、これまでに見てきた語彙的構文化の事例とは異なり、必ずその補文を必要とし、自らは接続詞的な機能を果たしている。従来これは文法化の事例として分析されてきた事例に分類される現象であり、意味の漂白化（「想定する（suppose）」の意味が条件標識 if に相当する）、カテゴリーシフト（内容語である動詞の分詞形から機能語である接続詞へ）が起こることが考察されている。このタイプの構文化は Traugott and Trousdale (2013)では「手続き的な意味をもつ文法的構文化」とみなされている。

ただし、ここで変化しているのは supposing の意味だけではない。supposing を用いた懸垂分詞節全体に目を移すと、後続する主節を伴わずに懸垂分詞節だけで中断する使用例が多く見つかる。またその場合に伝達される意味は、懸垂分詞節そのままではなく、後続するはずであった主節の意味であり、またそれに端を発し、次第にそれ単独の意味を表していることが観察される。これは形式と意味とのミスマッチであり、Evans (2007)による「従属節の主節化(insubordination)」に相当する現象である。(14)はその例である。

(11) a. ***Supposing*** that he risked a search, what would be the best way?

b. ***Supposing*** I don't see her?

c. ***Supposing*** it isn't the tramp, Shirley! ***Supposing*** it really is a fire! The tramp might have lighted a fire and left it burning. …" (BNC) (もしかすると浮浪者じゃないかもしれないよ、シャーリー。本当の火事かもしれないよ。浮浪者が火をつけたまま去って行ったのかも…)

d. A: On the afternoon of October 8. Were you not in a travel agency in Regent Street? And did you not make inquiries about prices and schedules of foreign cruises? B: Supposing I did? It's not a crime, is it? Not at all. Many people go on a cruise when they can afford to pay for it. (Witness for the Prosecution (1958)) (「10 月 8 日の午後リージェントストリートの旅行会社にいませんでしたか？そして海外クルーズの値段とスケジュールについて尋ねませんでしたか」「そうだったらどうだっていうの？それって犯罪じゃないでしょ。全然違うわ。資金に余裕があるならクルーズに行く人なんてたくさんいるもの」)

(14a)は「危険を冒して捜索をしたとすれば、どういう方法がよいだろうか」という懸垂分詞構文（ひいては if 仮定条件文）である。(14b)では主節が非明示であるものの、意味としては「もし彼女に会わなかったら＜どうしたらよいのだ＞」という質問機能を表している。

さらにそこから転じた(14c)では、質問に対する応答は要求せず、「あの煙は浮浪者のものじゃないかも知れないよ！」という強い懸念を伝達している。また(14d)は相手の先行する発言の内容を supposing の「補文」に代入することで「もしそうだったらどうだっていうの？」と挑戦的で反抗的な態度を伝達している。

(14c)(14d)へと下るにつれて、強調されていくのは話者のモダリティの強さである。この意味は supposing という語に分析的に帰することはできず、むしろ supposing で始まる懸垂分詞節全体に対応する意味と考えるべきである。つまり、supposing～？という懸垂分詞節に、その形式からは直接的には導かれないモダリティ的意味が対応した構文化が生じ、その中でさらに特殊な形式である(14d)が生まれてくると考えられる。

Supposing が if に相当する意味に変化することは、従来も文法化というくくりの中で説明されてきたが、ここで述べたような supposing 節全体が特定の意味を表すようになる従属節の主節化現象は、文法化という概念の範疇ではなく、むしろ逆を行くものと考えられがちであった。しかし構文化という考え方を取り入れることで、内容語から機能語へという一方向だけではなく、従属節から主節へという方向の意味変化現象をも広く包括的に捉え直せることになる。

3.3. 構文化と文脈：懸垂分詞構文のシナリオ的展開

ここまで、懸垂分詞節由来の構文化には、大別して語彙的構文化と文法的構文化があることを見てきた。speaking of which や having said that、また granted や considering は（全体として）1 つの語として機能し、意味としては話者のメタ的コメントを表す副詞的要素へと変化する。この変化は内容語から内容語への変化であり、語彙的構文化に分類される。一方 supposing は条件の接続詞 if に相当する変化を見せ、さらにそこから supposing 節単独の形式に話者のモダリティを伝達する意味が対応する、文法的構文化と見なされる。

このように 2 つのタイプはその性質が異なっているが、その成り立ちにはいずれも懸垂分詞構文由来の変化としての共通性を見いだすことができる。まず、懸垂分詞構文は統語的に複文構造を成しており、また懸垂分詞節はその中で従属節、つまり依存的(dependent)な存在である。そこから派生した構文化には、必ずそれに自律的に対応する主節の存在が踏まえられている。同じように、懸垂分詞節由来の変化も、それ単独で存在する自律的(autonomous)な表現ではなく、むしろ依存的(dependent)な表現である。Speaking of which や having said that、また granted/considering も、必ずそれに後続する表現を必要とする。また supposing 節も、意味の上ではそれに後続する要素を必要とし、それを伝達しているところから始まっている。また、どれも単なる情景描写ではなく話者によるメタ的なコメントや談話管理機能を表す方向へと意味を変化させており、最終的には対人関係を意識し配慮するような機能を果たしている。

また、懸垂分詞構文にはシナリオ的に展開する意味が対応している（早瀬（2008), Hayase（2011））。具体的には「（概念化者が）ある行為認識を行った結果、（概念化者が）

ある知覚認識を得る」というものとして提示した。つまり懸垂分詞節は概念化者、典型的には話者による主観的な捉え方を示している（早瀬 2009, Hayase 2011）。その一部が意味変化を起こした場合、話者のメタ的コメントや談話管理機能へと変化するのは、構文の意味を引き継いだ自然な流れと捉えられる。

また、懸垂分詞構文はその主節の 3 分の 2 が現在時制で用いられることからもわかるように、発話の場に密着している（早瀬 2009, Hayase 2011）。発話の場には当然聞き手も相手役として存在するため、対人関係的機能が自然に派生しやすい文脈であることがわかる。

さらに、懸垂分詞構文の主節は出来事の描写ではなく、話者や語り手の主観的判断を述べるものが多く、そのことは状態アスペクトの割合（および現在時制の割合）が高いことからもうかがい知ることができる。このことは、懸垂分詞構文が用いられている談話やコンテクストをマクロにみると確かめられる。懸垂分詞構文は、他の談話と一線を画し、描写から判断へという転換点に用いられるものなのである。

たとえば、以下の例は過去時制で統一されている散文だが、懸垂分詞構文で描写されている文が描写しているのは他の文とは異なり、実際に飛行機に乗っている人の視点から書かれていることが確認できる。

(12) Suitable weather conditions, i.e., adequate cloud cover, were considered essential for these risky daylight raids and unfortunately very few days in May and June proved to be usable. Towards the end of June, Bremen was targeted and the Squadron attack force took-off on the 28th of the month and headed out low level over the sea. *Approaching Heligoland, the weather was obviously unsuitable* and so the mission was abandoned and the aircraft went home.

ここでは、目標とされたブレーメンへの空爆が、ヘリゴランド島に近づいた時に期待に反して天候が悪く、予定に反して成されなかったことを示唆する。つまり、予期した通りにものごとが運んでいくのではなくて何らかの転機を示唆している。次の例も同様である。

(13) *Talking to Glenn before his contest with Averil Marshall* it was clear he did not like losing. *Looking back,* that square was my gateway to the real world —; and the gate could only work one way.

ここでは懸垂分詞構文が 2 つ連続して生じているが、いずれも語りの場面や視点の転換を行っている。Glenn と話をして彼が負けず嫌いであるとわかったこと、また過去を振り返って、その時が現実世界への一方通行の門戸を開く転機となった、と今感じること、を叙述しており、どちらも主節では語り手の判断を表している。つまり、懸垂分詞構文は場面転換の折に使われる、ということである。懸垂分詞節に後続する主節では、新しい事実や見解の発見・認識が描かれており、基本的に何らかの変化局面で好まれているのである。

懸垂分詞由来の表現の意味にも変化局面の persistence が見られる。speaking of which や having said that が話題転換を、considering が評価の緩和を、また granted が承認し

た上でやはり話題を変える役割を、supposing が聞き手に新しい想定を課したり挑戦的に相手の意図を読もうとするなど、いずれも変化の局面を表すマーカーとして使われている。

このように、それぞれに異なる発達を見せながらも、いずれも懸垂分詞構文由来という特徴は保持していると考えられるのである。

4. まとめ

懸垂分詞の対人関係機能の発生現象には、語彙化（語彙的構文化）、文法化（文法的構文化）および従属節の主節化という少なくとも３つの異なるプロセスが関わっている。従来はそれぞれ異なるカテゴリーに分属されてきた現象だが、どれも懸垂分詞構文を元にしているという大きな共通性が見られる。この共通性は「構文化」という概念で広く大きく捉え直すことができることを概観した。

参考文献

Brinton, Laurel J. and Elizabeth C. Traugott 2005. *Lexicalization and Language Change*. Cambridge: Cambridge University Press.

Evans, Nicholas 2007. "Insubordination and its uses," *Finiteness: Theoretical and Empirical Foundations*, Irina Nicholaeva (ed.) Oxford, Oxford University Press, 366-431.

Goldberg, Adele. 1995. *Constructions: a construction grammar approach to argument structure*. Chicago: University of Chicago Press.

Goldberg, Adele. 2006. *Constructions at work: the nature of generalization in language*. Oxford: Oxford University Press.

Hayase, Naoko 1997. "The Role of Figure, Ground, and Coercion in Aspectual Interpretation," in Marjolijn Verspoor, Kee Dong Lee and Eve Sweetser (eds.) *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of Meaning*, Mouton de Gruyter. Berlin, 33-50.

早瀬尚子 2009.「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明（共編）『「内」と「外」の言語学』開拓社, 55-98.

早瀬尚子 2011.「懸垂分詞派生表現の意味変化と（間）主観性－considering と moving on を例に－」『言語における時空をめぐって』(大阪大学言語文化研究科) 9, pp.51-60.

早瀬尚子 2014.「Supposing による脱従属化現象：発話行為文の発生について」『言葉のしんそう（深層・真相）―大庭幸男教授退職記念論文集』英宝社.

早瀬尚子 2015.「懸垂分詞を元にした談話機能化について―granted の意味機能変化―」『言語研究の視座―坪本篤朗教授退職記念論文集』開拓社、pp. 310-324.

Hayase, Naoko 2011. "The cognitive motivation for the use of dangling participles in English" In *Motivation in grammar and the lexicon: cognitive, communicative, perceptual and socio-cultural factors*," eds. Radden and Panther, Amsterdam/Philadelphia: Benjamins, 89-106.

Hayase, Naoko 2014. "The Motivation for Using English Suspended Dangling Participles: A Usage-Based Development of (Inter)subjectivity," Evie Coussé and Ferdinand von Mengden (eds.) *Usage-Based Approaches to Language Change*, a series of *Studies in functional and structural linguistics,* John Benjamins.

Hopper, Paul and Elizabeth C. Traugott 2003. *Grammaticalization*. 2nd edition. Cambridge: Cambridge University Press.

Kortmann, Bernd and Ekkehard Konig 1990. "Categorial Reanalysis: the case of deverbal prepositions," *Linguistics* 30: 671-697.

Traugott, Elizabeth C. and Graeme Trousdale 2013. Constructionalization and Constructional Change. Oxxford: Oxford University Press.